

童謡・唱歌の習得に関する研究

—学生および高齢者対象アンケート調査にみる現状—

坂井 加奈

(西九州大学短期大学部 幼児保育学科)

(平成22年 2 月 9 日受理)

A Study on Acquisition of Nursery Rhymes and Sho-ka
-An analysis of questionnaire for students and senior people-

Kana SAKAI

(*Department of Early Childhood Education and Care, Nishikyusyu University Junior College*)

(Accepted February 9, 2010)

Abstract

Recently, the number of young people who don't know the nursery rhymes and sho-ka has increased. However, when they grow up, the nursery rhymes become support of the mind. The nursery teachers training school have an educational obligation to make them familiar with the nursery rhymes and sho-ka in all generations. In this research, I questioned to the students and the senior people about the acquisition of the nursery rhymes and so on.

Key words : the nursery rhymes 童謡
sho-ka 唱歌

I. はじめに

近年、音楽活動を通して高齢者と接する機会が増えてきている。彼らの最も関心の高い曲は、やはり童謡や唱歌といったジャンルのようである。誰しもが歌った記憶があり、歌詞を見なくても自然と身体が覚えているからであろう。認知症を患った方でも、耳にした途端に目の輝きを取り戻し生き生きと歌っている。保育士養成校教員である筆者にとって、童謡や唱歌を教える意義がそこに隠されているような気がしてならない。老いて記憶が定かでなくなっても、童謡や唱歌といった刺激によって、再び脳は啓発される。彼らには、頭だけでなく体で覚えた原風景が備わっているのであろう。子ども時代に得た感情とりわけ満足感は、大人になっても思い出として残り、このように心の中に宿っているといえる（大島2005）。

しかし近年、「知っていて当然ではないか」と思われるような童謡や唱歌さえ、知らずに入学してくる学生が多いように思う。そもそも、彼らの親の世代にすら知られていない作品があることには驚かされる。しかし、保育士を目指す彼らは今後、少なくとも授業や現場を通して知る機会があるに違いない。しかしそうでない若者はどうだろう。幼少の頃に知る機会がなければ、今後出会うことは非常に難しい。次世代の子ども達に与える影響も少なくないであろう。

童謡や唱歌を習得するプロセスにおいて、昔と現在ではどのような変化が生じているのだろうか。その要因として、家庭環境、マスメディア、保育現場や学校教育の変化など多くが考えられる。2007年には文化庁が「親子で歌いごう日本の歌百選」を選定する動きがあったが、それは、前述のような危機的状況を回避するための策だったのではないか。つまり童謡や唱歌を歌い継ぎたくても、妨げられてしまう要因があるのではないだろうか。

本研究は2部にわたって構成する。ここではまず、本学の学生と高齢者を対象に童謡・唱歌についての調査をし、認知度についてどれほどの差異があるのか現状把握を行った。またこれらの習得方法や童謡および唱歌に対する彼らの率直な考えについても明らかにし、今後の授業内容や指導の改善に活かしたいと考えている。

II. 童謡と唱歌の定義について

研究に先立ち、童謡と唱歌の定義について一言述べておきたい。現代において、童謡と唱歌は同義語のように使われている傾向があるが、厳密には成り立ちが若干異なる。

唱歌とは、1910年（明治43年）の『尋常小学読本唱歌』から1944年（昭和19年）の『高等科音楽一』までの教科書に掲載された楽曲であり、1910年代から第二次世界大

戦まで尋常小学校で教えられた。いわゆる「文部省唱歌」と呼ばれるものである。主に文語体で書かれ、日本の風景や風俗、訓話などを歌ったものが多い。つまり徳育や情操教育といった意味合いが非常に濃いものであった。

対して童謡は、唱歌の持つそういった教育的意味合いに反論し、「子どもが自然と口ずさむような、子どものための歌を作ろう」という鈴木三重吉（1882～1936）の考えの元に発生した。

III. 方法

学生および高齢者対象のアンケート調査や、文献調査を元に行う。

1. アンケート対象者

西九州大学短期大学部幼児保育学科1年次生78名、O老人会会員40名（70歳以上）

2. アンケート日時

前者には、後期開講した筆者担当「総合演習Ⅰ」第1回目にて行った。後者には、筆者が地域貢献事業として取り組んでいる、O地区の老人会月例講座“ああ～懐かしい歌のピアノ演奏”にて行った。いずれも調査時期は2009年9月某日である。

3. アンケート内容

- ① 童謡・唱歌の認知度について
- ② 童謡・唱歌の習得方法について
- ③ 童謡・唱歌の習得に関する見解
- ④ 世代を超えた人達と歌う歌と、その選択理由について

4. 回答率

調査の回答者はそれぞれ学生70名、高齢者34名（回答率88%）であった。

IV. 結果と考察

① 童謡・唱歌の認知度について

今回のアンケートに使用した曲は、市販テキストや過去の音楽教科書への頻出度が高い童謡および唱歌、計56曲である。アンケート用紙には、

- a. メロディもよく知っている
- b. 題名を聞いたことはあるが、メロディが浮かばない
- c. 全く知らない

の三段階を挙げ、それぞれ回答させた。結果の全容は表1の通りである。

表 1 学生・高齢者対象の認知度調査

A. 学生による認知度が5%未満

題 名	最初の歌詞	学 生					高 齢 者					作品 誕生年	文部省 唱歌	教科書以外の 出版元	現在の 共 通 教 材
		aの 割合	a (人数)	b (人数)	c (人数)	計 (人数)	①の 割合	a (人数)	b (人数)	c (人数)	計 (人数)				
村の鍛冶屋	しばしも止まずに	0%	0	5	65	70	88%	30	0	4	34	T 1	小 4		
叱られて	叱られて	0%	0	3	67	70	71%	24	0	10	34	T 9		少女号	
あの町この町	あの町この町	0%	0	8	62	70	65%	22	0	12	34	T 13		コードモノクニ	
かやの木山の	かやの木山の	1%	1	14	55	70	21%	7	0	27	34	T 10			
からたちの花	からたちの花が	1%	1	10	59	70	82%	28	0	6	34	T 12			
夏は来ぬ	うのはなの	1%	1	7	61	69	71%	24	0	10	34	M 29		新編教育唱歌集	
日の丸	しろじに赤く	3%	2	12	56	70	97%	33	0	1	34	M 44	小 1		小 1
冬景色	さざりきゆる	3%	2	11	57	70	47%	16	0	18	34	T 2	小 5		小 5
早春賦	春は名のみ	3%	2	9	59	70	59%	20	0	14	34	T 2		新作唱歌	中 3
椰子の実	名も知らぬ	3%	2	16	52	70	65%	22	0	12	34	S 11		レコード	
月の砂漠	月の砂漠を	3%	2	9	59	70	79%	27	0	7	34	T 12		少女倶楽部	
村祭り	村の鎮守の	3%	2	10	57	69	91%	31	0	3	34	M 45	小 3		
あわて床屋	春ははようから	3%	2	4	63	69	41%	14	0	20	34	T 8		赤い鳥	
かなりや	歌を忘れた	4%	3	9	58	70	82%	28	0	6	34	T 7		赤い鳥	

B. 学生による認知度が10～60%程度

題 名	最初の歌詞	学 生					高 齢 者					作品 誕生年	文部省 唱歌	教科書以外の 出版元	現在の 共 通 教 材
		aの 割合	a (人数)	b (人数)	c (人数)	計 (人数)	①の 割合	a (人数)	b (人数)	c (人数)	計 (人数)				
どこかで春が	どこかで春が	10%	7	20	43	70	47%	16	0	18	34	T 12		小学男生	
浜辺の歌	あした浜辺を	13%	9	13	48	70	71%	24	0	10	34	T 2		音楽	中 2
里の秋	静かな静かな	14%	10	11	49	70	68%	23	0	11	34	S 20			
雀の学校	ちいちいばっば	19%	13	29	28	70	76%	26	0	8	34	T 10		少女号	
ふじの山	頭を雲の	19%	13	23	33	69	82%	28	0	6	34	M 43	小 2		小 3
ゆりかごのうた	ゆりかごの歌を	20%	14	16	40	70	62%	21	0	13	34	T 10		小学女生	
この道	この道はいつか	20%	14	16	40	70	85%	29	0	5	34	S 4			高校
鯉のぼり	いらかの波と	23%	16	24	30	70	68%	23	0	11	34	T 2	小 5		小 5
赤い靴	赤い靴はいてた	23%	16	22	31	69	71%	24	0	10	34	T 10		小学女生	
待ちぼうけ	待ちぼうけ	27%	19	30	21	70	79%	27	0	7	34	T 12		満州唱歌集	
靴が鳴る	お手てつないで	34%	24	12	34	70	79%	27	0	7	34	T 8		少女号	
荒城の月	春こうろうの	36%	25	31	14	70	100%	34	0	0	34	M 34		中学唱歌	中 2
月	でたでた月が	37%	26	31	13	70	97%	33	0	1	34	M 43	小 1		
おうま	おうまの親子は	37%	26	21	23	70	91%	31	0	3	34	S 16	小 1		
せいくらべ	柱の傷は	43%	30	26	14	70	74%	25	0	9	34	T 12			
われは海の子	我は海の子	44%	31	9	30	70	94%	32	0	2	34	M 43	小 6		小 6
おぼろ月夜	菜の花畑に	54%	38	17	15	70	97%	33	0	1	34	T 3	小 6		小 6
肩たたき	かあさんお肩を	54%	38	12	20	70	79%	27	0	7	34	T 12		幼年の友	
花	春のうららの	59%	41	18	11	70	76%	26	0	8	34	M 33			中 3
みかんの花咲く丘	みかんの花が	61%	43	9	18	70	82%	28	0	6	34	S 21		ラジオ	

C. 学生・高齢者による認知度が、ほぼ同等に高い

題 名	最初の歌詞	学 生					高 齢 者					作品 誕生年	文部省 唱歌	教科書以外の 出版元	現在の 共 通 教 材
		aの 割合	a (人数)	b (人数)	c (人数)	計 (人数)	①の 割合	a (人数)	b (人数)	c (人数)	計 (人数)				
春よ来い	春よ来い	80%	56	12	2	70	91%	31	0	3	34	T 12			
虫のこえ	あれまつむしが	81%	57	10	3	70	94%	32	0	2	34	M 43	小 3		小 2
もみじ	秋の夕日に	84%	59	6	5	70	85%	29	0	5	34	M 44	小 2		小 4
春の小川	春の小川は	86%	60	9	1	70	91%	31	0	3	34	T 1	小 4		小 3
茶摘み	夏も近づく	87%	61	4	5	70	97%	33	0	1	34	M 45	小 3		小 3
夕焼けこやけ	夕焼けこやけで	89%	62	5	3	70	94%	32	0	2	34	T 7		赤い鳥	小 2
仰げば尊し	仰げば尊し	94%	66	3	1	70	91%	31	0	3	34	M 17			
たなばたさま	笹の葉さらさら	97%	68	2	0	70	91%	31	0	3	34	S 16	小 2		
海	海は広いな	99%	69	1	0	70	97%	33	0	1	34	S 16	小 1		小 1
雪	雪やこんこ	99%	69	1	0	70	94%	32	0	2	34	M 44	小 2		
春が来た	春がきた	99%	69	1	0	70	91%	31	0	3	34	M 43	小 3		小 2
かたつむり	でんでんむしむし	100%	70	0	0	70	97%	33	0	1	34	M 44	小 1		小 1

D. 学生による認知度が、高齢者を上回っている

題 名	最初の歌詞	学 生					高 齢 者					作品 誕生年	文部省 唱歌	教科書以外の 出版元	現在の 共 通 教 材
		aの 割合	a (人数)	b (人数)	c (人数)	計 (人数)	①の 割合	a (人数)	b (人数)	c (人数)	計 (人数)				
花火	どんと鳴った	100%	70	0	0	70	59%	20	0	14	34	S 16	小 2		
赤とんぼ	夕焼けこやけの	100%	70	0	0	70	88%	30	0	4	34	T 10			中 1
どんぐりころころ	どんぐりころころ	100%	70	0	0	70	91%	31	0	3	34	T 10		かわいい唱歌	
ぞうさん	ぞうさんぞうさん	100%	70	0	0	70	85%	29	0	5	34	S 23		ラジオ	
たきび	垣根のかきねの	99%	69	0	1	70	71%	24	0	10	34	S 16		ラジオ	
しゃぼん玉	しゃぼん玉とんだ	99%	69	1	0	70	88%	30	0	4	34	T 11		金の塔	
あめふり	雨雨降れふれ	97%	68	1	1	70	88%	30	0	4	34	T 14		コードモノクニ	
めだかの学校	めだかの学校は	97%	68	2	0	70	79%	27	0	7	34	S 26		ラジオ	
七つの子	カラスなぜ鳴くの	86%	60	7	3	70	79%	27	0	7	34	T 10		金の船	
赤い鳥小鳥	赤い鳥小鳥	76%	53	10	7	70	53%	18	0	16	34	T 7		赤い鳥	

調査の結果、学生による認知度は、全体的に高齢者よりもかなり低いことが分かった。全体を4類に分け、分類ごとに結果を確認し、考察を加えることとする。

A. 学生による認知度が5%未満

ほとんどが明治・大正に作られている。高齢者の割合にも多少のばらつきが見られるが、80%以上の高齢者が知っているのにも関わらず、学生の多くが知らないものは「村の鍛冶屋」、「からたちの花」、「日の丸」、「村祭り」、「かなりや」である。

また、高齢者の認知度もさほど高くない(50%以下)ものは、「かやの木山の」、「あわて床屋」、「冬景色」であった。「冬景色」に関しては、文部省唱歌として誕生し、現在の小学校教科書の共通教材にまで残っているにも関わらず、高齢者・学生どちらの認知度も低く、疑問が残る。

「かやの木山の」や「あわて床屋」に関しては、過去教科書に掲載された経緯はなく、童謡の中でも「芸術歌曲」としての要素を持つ。子どもが歌うというより、「大人が歌って聞かせる」といった特徴である。

「村の鍛冶屋」、「村祭り」に関しては、現在では見られなくなった昔ながらの風習や職業などが、歌の世界からも姿を消そうとしていることが分かる。現に、これらの歌詞は、古い言い回しを現代の言葉に合わせるために書き換えられた経緯を持つ。

B. 学生による認知度が10~60%程度

現在の小学校教科書共通教材が多く含まれているにも関わらず、認知度はさほど高くはないことが分かる。「ふじの山」、「鯉のぼり」、「われは海の子」、「おぼろ月夜」などである。

「浜辺の歌」、「荒城の月」、「花」に関しては、現在中学校教科書の共通教材として挙げられている作品群である。しかしながら学生にとっては、習得した時期がわずか3、4年前にあたるにも関わらず、記憶に残っていないという。なお、共通教材とは、授業時間中にすべてを履修しなければならないという程の強制力はなく、列挙されたもののうち数曲を取り組めばよいことになっている。地域や学校、担当教員の判断に委ねられている部分も多いため、学生はそもそもふれる機会が与えられなかったとも考えられる。

C. 学生・高齢者による認知度がほぼ同等に高い

12曲中10曲が文部省唱歌であり、現在も共通教材として教科書に残っているものである。特に「かたつむり」、「春が来た」、「雪」、「海」、「たなばたさま」、「上げば尊し」に至っては、学生による認知度も90%を超えている。

「春よ来い」、「夕焼けこやけ」に関しても、文部省唱

歌ではないとはいえ、幼児に聞かせるための歌であることがわかる。対象者は保育者養成校の学生であるため、元々関心があったとも考えられ、高い認知度だったと推測される。

D. 学生による認知度が、高齢者を上回っている

10曲中、「花火」のみが文部省唱歌であるが、現在の共通教材ではないにも関わらず100%に及んでいる。これは、本学の音楽の授業にて試験曲となった経緯があり、全員が知っているという結果となった。

またその他9曲に関しても、教科書に掲載されている否に関わらず、すべて童謡であること、つまり保育士養成校特有の結果であることが伺える。

C、Dの結果の通り、幼児期に扱われる曲目については、学生による認知度も比較的高い。それはアンケート対象者が保育士養成校の学生であることも要因の一つであろう。しかし小学校以降に習うであろう曲については、格段に認知度が下がる。つまり幼児期においては、周りの大人が保育の中で意識的に歌を扱っているが、小学校以降は、そのような環境に何らかの変化が訪れるようである。小学校以降における童謡・唱歌の習得方法に原因があるのであろうか。

② 童謡・唱歌の習得方法について

次に学生・高齢者の両者に、童謡や唱歌を習得した方法について調査した。結果は表2の通りである。

表2 童謡・唱歌の習得方法について

	学生		高齢者	
	人数	%	人数	%
教科書	27	39%	23	68%
ラジオ・テレビ	15	21%	2	6%
周りの大人から	28	40%	3	9%
無回答	0		6	
計	70		34	

情報化社会の真っ只中を生きる学生世代だが、マスメディアによる習得率は意外に低い。マスメディアが提供する音楽からも、純粋な童謡や唱歌が減ってきたせいであろうか。NHKが送る1961年から始まった「みんなのうた」に注目してみても、初期は既存の童謡・唱歌を取り上げることが主流であったものの、最近は新しい作曲家による思春期世代向けの作品を流す例が増えている。

一方、「周りの大人から教えてもらった」という回答は比較的多い。これも保育士養成校であるが故、幼い頃の思い出が色濃く残っているせいであろうか。また今日は保育園出身の学生も増えてきたため、家庭以外で習得

する機会が増えているとも考えられる（小川2006）。周りの環境による影響が大きいことが伺える。

学生と高齢者とを比較し、大きい差が見られるのが「教科書による習得」である。学生が3割台なのに対し、高齢者は7割近くを誇る。教科書は、昔も今も変わらず、全ての子どもが共通してふれることのできるツールのはずである。童謡や唱歌が、教科書に掲載されているか否かは、今後の認知度にも大きく関わってくるのではない。今後注目すべき点である。

③ 童謡・唱歌の習得に関する見解

童謡や唱歌は、幼児期だけでなく、高齢になってからも我々の心に安らぎと落ち着きを与える。それぞれの世代は、童謡や唱歌に対し、どのような考えを抱いているのか調査した。結果は次の通りである。

[] 内には選んだ人数を示している。

（学生の回答）

○学習目的としての好意的な記述

- ・子どもと遊んだりする時に使えていい・とても勉強になる・役に立つ。[17名]
- ・幅広い年代の曲や昔から伝わっている曲を知れていい。[8名]
- ・今の世代に昔の話を伝えていければいいと思う。[6名]
- ・もっとたくさん知りたい・学んでいきたい。[5名]
- ・知っていて損はしない。[2名]
- ・昔にもいい歌があったことを知れるのでいいと思う。
- ・伝統が受け継がれていていいと思う。
- ・保育現場でも使われている。
- ・季節に合った知らない歌がたくさんあったので、習ってよかった。
- ・昔の歌についてのたくさんの知識を知ることができた。

○童謡・唱歌の特徴に注目した記述

- ・昔の歌は歌いやすい・覚えやすい・短いので、子どもに向いていると思う。[5名]

○コミュニケーション手段として注目した記述

- ・今時の歌もいいけど、昔の曲だとお年寄りともコミュニケーションがとれるからいい。[3名]
- ・子どもと一緒に歌ったりできるといいなと思う。[2名]
- ・お年寄りの人に接するときに役立つ。
- ・子ども達やおじいちゃん、おばあちゃんも喜ぶと思う。

○感情に関する記述

- ・なつかしくて楽しい。[4名]
- ・色々と昔の歌が分かっている、楽しい・面白い。[3名]

○その他の記述

- ・これからよく歌うのでとてもためになったけど、今の子どもたちが好きな歌（アニメ）も歌いたい。[2名]（高齢者の回答）
- ・歌は心の支えにしてくれる。
- ・思い出の歌、老いを助けてくれる。
- ・きくとふっと優しい心になる。
- ・ただなつかしい。童心に返ったような気持ち。
- ・強制的な音楽の無理強いは困るが、音楽の楽しさが理解され、自ら口ずさむ曲は歌い継いでほしい。
- ・日本の歴史を伝える歌は、良否には関係なく、こんな時代もあったのだ、ということ伝えるのによい。

学生の結果からは、保育者としての目線から、現場で役立てたいとの気持ちが伺えた。普段は流行歌を歌いたがる学生も、子どもに適した歌はどのようなものか、なぜ適しているのかを考えていることがわかる。さらに、昔のものを伝えていく大切さについて言及する学生もあり、全体的に好意的な印象を抱いていることが分かった。

高齢者の立場からみると、学生の意見とはまた異なっている。学生はその場を楽しんだり、子どもの成長を促すツールと認識しているのに対し、高齢者は昔を振り返り、過去を美しいものへと導いてくれたり、人生をより豊かにするためのものという認識が強い。それは思い出などの過去と密接に結びついている。

これは学生ほどの年齢の人間には感じることでない感情であろうが、若い頃に習得した童謡や唱歌が、何十年もの年月を経て心の支えになることは、大変心強いことであり、幼児への提供がいかに重要かということが伺える。

④ （学生対象）世代を超えた人達と歌う歌と、その選択理由について

結果として次のような歌が選ばれた。[] 内には選んだ人数を示している。また引き続き、それらの選択理由についても挙げている。

海 [6名]、夕焼け小焼け [6名]、どんぐりころころ [5名]、茶摘み [5名]、赤とんぼ [5名]、みかんの花咲く丘 [4名]、しゃぼんだま [3名]、春が来た [2名]、めだかの学校 [2名]、肩たたき [2名]、ぞうさん [2名]、ゆりかごの歌、もみじ、ふじの山、虫のこえ、チューリップ、おぼろ月夜、せいくらべ、サザエさん、かえるの歌、さんぽ、七つの子、ふるさと、まっかな秋、花火、たなばたさま、君が代、仰げば尊し、たきび、小さな世界

○認知度の高さに注目した記述

幅広い年代・誰でも知っているから。定番であり、国民的だから。[31名]、幼稚園・学校で習うので、分かり

やすいと思うから。〔3名〕

○童謡・唱歌の特徴に注目した記述

歌いやすい・覚えやすいから。〔9名〕、手遊び・踊りができるから。〔9名〕、季節感があるから。〔6名〕、交流できるから。〔2名〕、輪唱できるから。帰る場面などで使いやすいから。長くないから。

○感情に関する記述

楽しい・明るいから。〔8名〕、心が落ち着く・あったかい・なつかしいから。〔4名〕、好きだから。〔2名〕

○学習教材として注目した記述

歌詞について学べるから。(茶摘み・春が来た)〔2名〕、みんなに知ってもらいたいから。〔2名〕

この設問においては、童謡や唱歌に限っていない。また設問目的としては、学生が幅広い年代の立場に立ってみて、どのような条件を基準に選曲するのかを明らかにしたかったためである。圧倒的に回答が多かったのは、その歌の持つ「認知度の高さ」であった。そしてその理由から選ばれた作品群はほとんど全てが童謡・唱歌であり、学生のような若い世代でも、年代を超えて皆で歌うのにふさわしい曲であると認識できていることがわかる。

V. ま と め

童謡や唱歌に関し、学生たちは関心を持たない訳ではなく、単に知る機会を与えられていないだけではないか。調査以前に抱いていた「最近の学生は古いものには関心がないのではないか」という疑念は払拭され、保育士養成校としては特に、この分野にさらに力を注ぐべきではないかと再確認した。子どもを取り巻く環境変化や問題が山積する昨今、家庭や保育現場など周りの大人がいかにか意識的に触れさせてあげるかが重要である。溢れる情報の中から自分で取捨選択ができる時代、教育現場のあり方も問われるが、就学前の教育（幼稚園や保育園）や家庭のあり方にもかかっていることがわかる。

今回、学生世代に童謡や唱歌に興味を持たせるきっかけを与えられたことは、大変有意義であった。そして今後授業においても、できるだけ多くの作品を知らしめ、伝統を歌い継いでいく大切さや、子ども時代に歌って聴かせる重要性を伝えていく必要がある。

また本学では、学生だけではなく、高齢者対象のエルダーカレッジや地域の親子対象「親子いきいき広場」などが行われている。そういった場で、様々な年代に対し、童謡や唱歌を歌うことの効能を広めていく教育的義務もあるのではないかな。

歌は、それが生まれた時代を反映していると言える。現代のように国境を超えた様々な曲種が氾濫していても、童謡や唱歌は、人が一生涯のうちに会える最初の曲であろうし、これからもそうであってほしい。子どものため

に生み出された歌は、今後彼らが生きていく中で他者を受け入れる基盤となり、自らを支えていく必要不可欠な素材といえる。子ども時代に歌った歌は、それぞれが違う人生を歩んだとしても、共通した思い出を育み、幸福感を伴わせるものである。

童謡や唱歌は、流行歌にはない普遍的な性質を持つ。特に「唱歌」は日本にしかない文化であるが、西洋のクラシック音楽と同様、これらは実際に“歌い”継がれていくべきものである。楽譜や書籍がいくら残っていても、それらが実際に歌われ、演奏され、音としてこの世に出てこなければ息づいていくことができない。その点において、童謡や唱歌はクラシック音楽と何の変わりもない。伝統的な遺産なのである。

今回の調査の中で、童謡や唱歌の習得について、音楽教科書の内容が大きく影響することが伺えた。今後の継続研究として、次項では童謡・唱歌の習得に影響する、現在の子どもの取り巻く環境要因について、音楽教科書の変遷にふれながら述べることにする。

VI. 参考文献

1. 大島清：歌うとなぜ「心と脳」にいいか？，新講社，2005
2. 小川宣子：乳幼児期のあやしあそびうたについて—アンケート調査を通して考える—，全国大学音楽教育学会研究紀要，第17号，2006
3. 近藤久美・岡田暁子・高御堂愛子：今どきの学生への音楽教育を考える（1）—文化庁選定「親子で歌いよう日本の歌百選」を通して—，全国大学音楽教育学会全国大会研究発表，2009